

ある日のことでございます。お釈迦様は極楽の蓮池のふちを、一人でぶらぶらお歩きになつていらつしやいました。

池の中に咲いている蓮の花は、みんな玉のように真っ白で、その真ん中にある金色のしべ*からは、何ともいえないよいにおいが、絶え間なくあたりへあふれております。極楽はちやうど朝なのでございましょう。

やがてお釈迦様は、その池のふちにお立ちになつて、水面をおおっている蓮の葉の間から、ふと下の様子をご覧になりました。

この極楽の蓮池の下は、ちやうど地獄の底に当たつておりますから、水晶のような水をすかして、三途の川*や針の山の景色が、ちやうどのぞき眼鏡を見るように、はつきりと見えるのでございます。

すると、その地獄の底に、犍陀多という男が一人、ほかの罪人といつしよに動いている姿が、お目に止まりました。①この犍陀多という男は、人を殺したり家に火をつけたり、いろいろ悪事を働いた大どろぼうでございしますが、それでもたった一つ、よいことをした覚えがございます。

ことば * しべ：花のおしべやめしべ。

* * 三途の川：死んだ人が渡ると考えられている川。

と申しますのは、あるとき、この男が深い林の中を通りますと、小さな蜘蛛が一匹、道ばたをはって行くのが見えました。

そこで犍陀多は、さつそく足を上げて、踏み殺そうとしましたが、「いや、いや、これも小さいながら、命のあるものに違いない。その命をむやみに取るということ、いくら何でもかわいそうだ。」と、②急に思い返して、とうとうその蜘蛛を殺さずに助けてやったからでございします。

お釈迦様は地獄の様子をご覧になりながら、この犍陀多には蜘蛛を助けたことがあるのを、お思い出しになりました。

そうして、それだけのよいことをした報い***には、できるなら、③この男を地獄から救い出してやろうとお考えになりました。

幸い、そばを見ますと、ひすい***のような色をした蓮の葉の上に、極楽の蜘蛛が一匹、美しい銀色の糸をかけております。

お釈迦様は、その蜘蛛の糸をそつとお手にお取りになって、玉のような白い蓮の間から、はるか下にある地獄の底へ、まっすぐにそれをお下ろしになりました。

ことば *** 報い：行いに応じて受けるもの。ここでは、よい行いに対して与えられるもの。

*** ひすい：緑色などをした宝石。

もんいち
問一

―①の「それでも」は、犍陀多についてのどのような内容を結びつけていますか。一つ選びましょう。

ア 多くの悪事を働いたことと、一度はよいことをしたことと。

イ 蜘蛛を助けたことと、そのあとで多くの悪事を働いたことと。

ウ 多くの悪事を働いたことと、地獄へ落ちたこと。

エ 蜘蛛を助けたことと、ほかの罪人も助けたこと。

こたえ

もんに
問二

―②で、犍陀多の考えはどう変わりましたか。初めと、変わったあとの考えが分かるように、六十字以内で書きましょう。

もんさん
問三

―③のようにお釈迦様が考えた理由として、本文に合うものを一つ選びましょう。

ア 犍陀多が地獄で悪事を反省している様子をご覧になったから。

イ 犍陀多がほかの罪人より苦しんでいることに気づいたから。

ウ 犍陀多が蜘蛛の命を助けたことへの報いを与えようとしたから。

エ 犍陀多が蜘蛛を助けてから、悪事をやめていたから。

こたえ

こちらは地獄の底の血の池で、ほかの罪人といっしょに、浮いたり沈んだりしていた犍陀多でございます。

何しろ、どちらを見ても真っ暗で、たまにその暗闇からぼんやり浮き上がっているものがあると思いますと、それは恐ろしい針の山の針が光るのでございますから、その心細さといったらありません。

そのうえ、あたりは墓の中のようにしんと静まり返って、たまに聞こえるものといえ、ただ罪人がつく、かすかなため息ばかりでございます。

これは、ここへ落ちて来るほどの人間は、もうさまざまな地獄の苦しみに疲れ果てて、①泣き声を出す力さえなくなっているのでございましょう。

ですから、さすがの大どろぼうの犍陀多も、やはり血の池の血にむせながら、まるで死にかかった蛙のように、ただもがいてばかりおりました。

ところが、あるときのことでございます。

何気なく犍陀多が頭を上げて、血の池の空を眺めますと、そのひっそりとした闇の中を、遠い遠い天上*から、銀色の蜘蛛の糸が、まるで人目にかかるのを恐れるように、一筋細く光りながら、するすると自分の上へ垂れて来るではございませんか。

犍陀多はこれを見ると、②思わず手を打って喜びました。この糸にすがりついて、どこまでものぼって行けば、きっと地獄から抜け出せるに違いありません。いや、うまくいくと、極楽へ入ることさえできるでしょう。

そうすれば、もう針の山へ追い上げられることもなくなれば、血の池に沈められることもないはずです。

ことば * 天上：空のはるか上。ここでは極楽のあるところ。

こう思いましたから、犍陀多は、さつそくその蜘蛛の糸を両手でしっかりとつかみながら、一生懸命に上へ上へとたぐりのぼり始めました。

もともと大どろぼうでございますから、こういうことには昔から慣れ切っているのです。

しかし、地獄と極楽との間は、何万里**というほど遠く離れていますから、いくらあせってみたところで、簡単には上へ出られません。

しばらくのぼるうちに、とうとう犍陀多もくたびれて、もう少しも上の方へのぼれなくなってしまうました。

そこで、まず一休みするつもりで、糸の途中にぶら下がりながら、はるか下を見下ろしました。

すると、一生懸命にのぼったかいたが、さつきまで自分がいた血の池は、今ではもう闇の底に、いつの間にか隠れています。それから、あのぼんやり光っている恐ろしい針の山も、足の下になってしまいました。

この調子でのぼって行けば、地獄から抜け出すのも、思ったより難しくないかもしれません。

犍陀多は両手を蜘蛛の糸にからませながら、ここへ来てから何年もの間、一度も出したことのない声で、

「③しめた。しめた。」と笑いました。

ことば ** 里：道のりの単位。「何万里」は、ここでは非常に遠いことを表している。

もんいち
問一

①の「さえ」は、どのような状態を強めて伝えていますか。一つ選びましょう。

ア 泣く力を使わず、地獄から逃げる力を残している状態。

イ 苦しみを泣き声で表す力も残らないほど、疲れ切った状態。

ウ 泣いても助からないと考え、自分から声を出さない状態。

エ 苦しみに慣れ、泣き声を出す必要がなくなった状態。

こたえ

もんに
問二

②で、犍陀多は糸によって何ができると思い、喜びましたか。地獄での苦しみにふれ、五十字以内で書きましよう。

もんさん
問三

③の言葉が出た理由として、最も適切なものを一つ選びましょう。

ア 血の池が見えなくなり、もう極楽に着いたと分かったから。

イ 下の様子を見て、糸が切れる心配はないと確かめられたから。

ウ 一休みをして、どこまでものぼれるほど力が戻ったから。

エ 血の池も針の山も下になり、地獄を抜け出せそうだと思ったから。

こたえ

ところが、ふと気がつきますと、蜘蛛の糸の下の方に、数限りもない罪人たちが、自分ののぼったあとを追って、まるでありの行列のように、やはり上へ上へ一心に*よじのぼって来るではございませんか。

犍陀多はこれを見ると、①おどろいたのと恐ろしいのとで、しばらくはただ、大きな口を開けたまま、目ばかり動かしております。

自分一人でさえ切れそうな、この細い蜘蛛の糸が、どうしてあれだけの人数の重みにたえられるでしょう。

もし途中で切れたとしたら、せつかくここまでのぼって来た、この大事な自分までも、元の地獄へまっ逆さまに落ちてしまわなければなりません。そんなことがあつたら、大変でございます。

ところが、そうしている間にも、罪人たちは何百人となく何千人となく、真つ暗な血の池の底からはい上がって、細く光っている蜘蛛の糸を、一列になりながら、せっせとのぼって来ます。

今のうちにどうにかしなければ、糸は真ん中から二つに切れて、落ちてしまふに違いありません。

ことば * 一心に：一つのことに心を集中して。

そこで犍陀多は大きな声を出して、「②こら、罪人ども。この蜘蛛の糸は、おれのものだぞ。お前たちは、いったいだれに聞いてのぼって来た。下りろ。下りろ。」と、わめきました。

③そのとたんでございます。今まで何ともなかった蜘蛛の糸が、急に犍陀多のぶら下がっているところから、ぷつりと音を立てて切れました。

ですから、犍陀多もたまりません。あつという間もなく風を切って、こまのようにくるくる回りながら、見る見るうちに闇の底へ、まっ逆さまに落ちてしまいました。

あとには、ただ極楽の蜘蛛の糸が、きらきらと細く光りながら、月も星もない空の途中に、短く垂れているばかりでございます。

もんいち
問一

―①で、**犍陀多**が恐ろしいと思ったのは、なぜですか。一つ選えらびましょう。

ア 大勢の罪人に追い越され、自分だけが地獄に残されると思おもったから。

イ 大勢の重みで糸が切れ、自分まで地獄に落ちると思おもったから。

ウ 罪人たちが下り始め、自分ものぼるのをやめなければならぬから。

エ 罪人たちが落ちないよう、自分が全員を支えなければならぬから。

こたえ

もんに
問二

―②には、どのような考えが表あらわれていますか。ほかの罪人と自分をどうしようとしていわるかが分かるように、五十文字以内で書かきましょう。

--	--	--	--	--

もんさん
問三

―③の場面について、この回の本文に書かれていることを一つ選えらびましょう。

ア 罪人たちが糸を引きちぎったので、**犍陀多**も落ちた。

イ お釈迦様が**犍陀多**の声を聞き、手で糸を切った。

ウ **犍陀多**が罪人たちに下りるよう叫きんだ直後、糸が切れた。

エ 人数の重みが原因で糸が切れたと、語り手が説明した。

こたえ

お釈迦様は極楽の蓮池のふちに立って、この一部始終*をじつと見ていらつしやいました。やがて犍陀多が血の池の底へ石のように沈んでしましますと、①悲しそうなお顔をなさりながら、またぶらぶらお歩きになり始めました。自分ばかり地獄から抜け出そうとする、犍陀多の無慈悲**な心が、そして、その心にふさわしい罰を受けて、元の地獄へ落ちてしまったことが、お釈迦様から見ると、②あさましく***思われたのでございましょう。しかし、極楽の蓮池の蓮は、③少しもそんなことには頓着****いたしません。その玉のような白い花は、お釈迦様のお足のまわりに、ゆらゆらと花の台の部分動かして、その真ん中にある金色のしべからは、何ともいえないよいにおいが、絶え間なくあたりへあふれております。極楽も、もう昼に近くなったのでございましょう。

ことば

- * 一部始終：出来事の初めから終わりまでのすべて。
** 無慈悲：相手を思いやる心がないこと。
*** あさましい：ここでは、心のあり方が卑しく、情けないこと。
**** 頓着する：気にかける。

もんいち
問一

―①の理由を、語り手はどう説明していますか。毘陀多の心と結末を、お釈迦様がどう受け止めたか、六十字以内で書きましょう。

もんに
問二

―②の「のでございましょう」から、語り手の述べ方について分かることを一つ選びましょう。

ア お釈迦様の気持ちを推し量って述べている。

イ お釈迦様が口にした言葉をそのまま伝えている。

ウ 毘陀多が自分の心を反省する言葉を伝えている。

エ お釈迦様の気持ちは分からないとして、説明を避けている。

もんさん
問三

―③と、そのあとの蓮の描写を合わせた説明として、最も適切なものを一つ選びましょう。

ア 蓮も毘陀多の転落を悲しみ、花をゆらしている。

イ 地獄の苦しみが終わったことを、蓮の美しさが知らせている。

ウ お釈迦様が悲しみを忘れたため、蓮もよいにおいを出し始めた。

エ 毘陀多の転落やお釈迦様の悲しみとは対照的に、蓮の美しさが続いている。

こたえ

こたえ

問3

正解：ウ

本文のどこを見るか

「蜘蛛を助けたこと」と「よいことをした報い」。

考え方

お釈迦様の判断の根拠を本文から確かめます。

誤答の理由

ア：地獄で反省したとは書かれていません。

イ：ほかの罪人より苦しいと比較していません。

エ：蜘蛛を助けたあと悪事をやめたとは書かれていません。

問2

解答例：初めは蜘蛛を踏み殺そうとしたが、小さくても命があり、むやみに殺すのはかわいそうだと考えるようになった。

本文のどこを見るか

足を上げた行動と、「いや、いや」からの言葉。

考え方

初めの考えと、思い直したあとの考えを整理します。

採点ポイント

① 初めは殺そうとしたこと。

② 小さくても命があり、殺すのはかわいそうだと考えたこと。

二点で正解。「助けることにした」だけなら、思い直した理由を補います。

問1

正解：ア

本文のどこを見るか

傍線①の「いろいろ悪事を働いた」と「たった一つ、よいことをした」。

考え方

「それでも」の前後にある、対照的な内容を捉えます。

誤答の理由

イ：出来事の時間順を示す働きではありません。

ウ：悪事と地獄に落ちた結果を結ぶ箇所ではありません。

エ：ほかの罪人を助けたとは書かれていません。

問3

正解：エ

本文のどこを見るか

見下ろしたときの血の池と針の山の様子。

考え方

問2は糸を見つけたときの期待、問3は実際に高くのぼれたことによる脱出への期待です。

誤答の理由

ア：まだ糸の途中です。

イ：景色から糸の強さを確認したではありません。

ウ：十分に力が戻ったとは書かれていません。

問2

解答例：糸をのぼって地獄を抜け出し、針の山や血の池の苦しみから逃れられると思ったから。

本文のどこを見るか

傍線②のあとに続く、犍陀多の考え。

考え方

糸を見つけ、苦しみから逃れる道ができたと考えています。

採点ポイント

① 糸をのぼって地獄を抜け出すこと。

② 苦しみから逃れること。

二点で正解。「地獄の苦しみ」とまとめても、「針の山」「血の池」の一方を挙げても構いません。「極楽に行ける」だけなら②を補います。

問1

正解：イ

本文のどこを見るか

「地獄の苦しみに疲れ果てて」と、傍線①の「力さえ」。

考え方

「さえ」は、苦しみを声にする力もないほどの疲れを強調しています。泣かないのではなく、泣くこともできない状態です。

誤答の理由

ア：力を残すためではありません。

ウ：自分から声を抑えているわけではありません。

エ：苦しみに慣れて平気になったわけではありません。

問3

正解：ウ

本文のどこを見るか

「下りろ。下りろ。」の直後にある「そのとたん」。

考え方

出来事の順序と、明示されていない原因を区別します。この回では切れた直接の原因や、だれが切ったかは説明されていません。

誤答の理由

ア・イ：そのような行動は書かれていません。
エ：重みで切れるというのは、犍陀多の心配です。
語り手が原因を確定した説明ではありません。
なお、第4回では「罰」と意味づけられます。

問2

解答例：ほかの罪人を糸から下りさせ、自分だけが地獄から助かろうとする考え。

本文のどこを見るか

「おれのもの」「下りろ」と、その前の「自分までも」。

考え方

人物への評価だけでなく、具体的に何を望んだかを説明します。

採点ポイント

① ほかの罪人を下りさせること。
② 自分だけ助かろうとすること。
二点で正解。「自分勝手な考え」だけなら、具体的な内容を補います。

問1

正解：イ

本文のどこを見るか

傍線①のあとの、人数の重みと「自分までも」という考え。

考え方

自分が地獄に落ちることを恐れていると読みます。

誤答の理由

ア：追い越されることを恐れたものではありません。
ウ：罪人たちはのぼり続けています。
エ：全員を支えようとしているものではありません。

問3

正解：エ

本文のどこを見るか

「頓着いたしません」と、そのあとに続く白い花・絶え間ないにおいの描写。

考え方

人物の出来事や悲しみと、それに左右されず続く極楽の美しい情景を対照させて読みます。

誤答の理由

ア：蓮が悲しむとは書かれていません。

イ：地獄の苦しみが終わったわけではありません。

ウ：お釈迦様が悲しみを忘れたとも、においを出し始めたとも書かれていません。

問2

正解：ア

本文のどこを見るか

「あさましく思われたのでございましょう」という語尾。

考え方

語り手は、お釈迦様の気持ちを押し量って説明しています。

誤答の理由

イ：会話の引用ではありません。

ウ：毘陀多の反省の言葉ではありません。

エ：押し量りながら、気持ちについて説明しています。

問1

解答例：自分だけ助かろうとする無慈悲な心と、その罰で地獄へ落ちた結末を、情けなく思ったのだらうと説明している。

本文のどこを見るか

傍線①の次の段落。「無慈悲な心」「その心にふさわしい罰」「あさましく」。

考え方

語り手による説明を読み、お釈迦様本人の発言と区別します。

採点ポイント

- ① 自分だけ助かろうとする心。
- ② その心に応じた罰で再び地獄へ落ちた結末。
- ③ それをあさましい、情けないと受け止めたこと。

三点で正解。「落ちたから」だけなら①③を補います。

使い方・出典・教材制作

蜘蛛の糸／小学5・6年生向け

印刷と使い方

全16ページ。児童用：1～11ページ、解答・解説：12～15ページ、使い方・出典：16ページ。第1～3回は本文2ページと問題1ページ、第4回は本文1ページと問題1ページです。A4横向き・片面・実際のサイズ（100％）で印刷します。本文を読む順に上へ並べ、問題をその下に置きます。

問題と採点

各回3問。4択2問と記述1問です。その回の本文を見ながら答えて構いません。記述は縦書きで、50～60字以内にまとめます。句読点も一字に数えます。上限まで埋める必要はなく、必要な内容が短く表せていれば正解です。内容の理解と字数条件は分けて確かめます。

読み方のポイント

人物の行動や心情だけでなく、言葉の働き、人物の予想と実際の出来事、語り手の述べ方、情景の対照を読みます。犍陀多の考え、語り手の説明、本文から読み手が推測したことを区別します。

糸が切れる場面について

第3回では、叫んだ直後に糸が切れたという順序が書かれています。だれが切ったかや、重さが直接の原因だったかは明示されません。一方、第4回では語り手が「罰」と意味づけています。この二つを混同しないようにします。

本文の扱い

提供された青空文庫本文をもとに、現代表記・一部語句・段落を小学生向けに整えました。ふりがな・注釈・傍線・全4回の区切りは教材用です。原文そのままの転載ではありません。人名の外字は、表示可能な「犍陀多」に置き換えています。

作者・作品

作品：『蜘蛛の糸』

作者：芥川龍之介

原文末尾の日付：大正7年4月16日

出典情報

底本：『芥川龍之介全集2』

ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年10月28日第1刷発行

1996（平成8）年7月15日第11刷発行

親本：筑摩全集類聚版芥川龍之介全集

1971（昭和46）年3月～11月

入力：平山誠、野口英司

校正：もりみつじゅんじ

1997年11月10日公開

2011年1月28日修正

出典の確認先

青空文庫

<https://www.aozora.gr.jp/>

本文と書誌・入力校正情報は、ご提供の青空文庫作成ファイルに基づきます。青空文庫の入力・校正・制作は、ボランティアの皆さんによるものです。

教材制作

家スタ！／学習舎シオン